

明治・大正期の中国語口語文法書における 語気詞名称の由来と伝承

盧 驍

Etymology and Inheritance of terms for modal particles in Chinese grammar books from the Meiji era to the Taisho era

LU Xiao

After the publication of Otsuki Fumihiko's *Shina Bunten* in 1877, Chinese grammar research in Japan turned to the study of colloquial grammar, which advanced the study to a new stage. Additionally, findings that theoretically organized and systematically summarized the research were published. This study focuses on the contents of modal particles in Chinese grammar books published from the Meiji era until the Taisho era. First, the author will show what terms were used by Japanese researchers when describing modal particles. Second, the author will investigate the origin of these terms by combining Chinese ancient books, Sinology materials from the Edo era, and Japanese grammar books from the early Meiji era.

The Japanese-created terms are based on the nature of modal particles. For terms borrowed from other literature, the study examines the type of literature where these terms were first seen, the meanings associated with the terms initially, and reasons behind these associations with regard to the study of Chinese colloquial grammar, with an aim to explore the effects of multiple factors involved in the research on modal particles.

キーワード：語気詞 (Modal particles)、名称 (name)、由来 (origin)、中国語文法書 (Chinese grammar books)、日本人研究者 (Japanese researchers)

1 はじめに

明治初期より大正後期にかけて編述された中国語口語文法著述において、語気詞と考えられる語に対する説明に、種々の名称が使われている（表1を参照）。中には、研究者自身によって案出されたもののほか、中国の典籍における古人の用語をそのまま継承したものもあれば、江戸時代の漢文法の研究成果との関連を色濃く現わしているものもある。更に、江戸末期以降の英和辞書や日本文典から借用されたものも見られる。

表1 明治・大正期の中国語口語文法書における語気詞の名称

書名	刊行年次	名称
大槻文彦解支那文典	明治10年	疑問副詞、感詞
村上秀吉著支那文典	明治26年	疑問詞、間投詞
官話輯要	明治30年	助語辞
官話文法	明治38年	問詞、答詞、未定詞
清語文典	明治38年	後置詞
清語正規	明治39年	助字
現代支那語学	明治41年	助辞
支那語文法	明治41年	句尾ノ助詞
北京官話文法・詞編	大正8年	語尾ノ助動詞
北京官話支那語文法	大正8年	後置詞
支那語語法	大正10年	語助字
支那語文法研究	大正11年	句末助詞

本稿では、明治、大正期に刊行された中国語口語文法書における語気詞の名称について精査し、その由来を考証しようとする。日本人自身による命名の場合、それが如何なる性質を基に作られた術語であるかを明らかにする。他文献から採り入れた用語の場合、これらの数多くの用語が一体いつ頃の文献に見え、どのような意味で使い始められ、如何に当時の中国語文法研究に受け継がれたかについて検討し、日本人研究者によって行われた中国語語気詞の研究に秘められた多重素因の影響を究明してみたい。

2 他文献から採り入れた術語

(1) 日本文典に由来する場合

• 感詞

「感詞」は『文学書官話』における「語助言」という品詞名に当てられた訳語である。『文学書官話』では、「語助言」について以下の解釈がなされている。

語助言一類的話，就是，啊，罷，咳，哎哟，罷了。這樣的話都是味氣的記號。啊是呼叫的記號。像，天父啊，求你聽我的禱告。罷是是使令的記號。像，抬轎罷。咳是傷歎的記號。咳，老先生死了。哎哟是驚懼異怪的記號。像，哎哟，好大水啊。罷了是夠數的記號，不論喜歡不喜歡的。像，罷了，我現今也進了學了¹⁾。

著者の Tarlton Perry Crawford が列記した「語助言」の例語には、「啊」、「罷」等の語気詞が入っている以外、嘆詞の「咳」、「哎哟」、「罷了」も加わっている。

『文学書官話』の和訳本『大槻文彦解支那文典』には、「語助言」について下記の注解が載せられている。

語ノ味氣ヲ助ケル言ニシテ多クハ情ニ感ジ發スル聲ナリ。洋語ニ感詞トイフモノ是ナリ²⁾。

大槻は原文に対して忠実な解釈を与えた上に、「情ニ感ジ發スル聲ナリ、洋語ニ感詞トイフ」という独自の考えも付け加えている。「感詞」という名称は田中義廉の著『小学日本文典』（1874）で用いられたのが最初である。但し、藤林普山によって訳述された『和蘭語法解』（1815）では、「本語『チュッセンウエルプセル』トハ、論説間或ハ上ニ置テ心意ノ感動ヲ明ス所以ノ言ナリ。故ニ今此ニ感言ト称ス³⁾」と記され、蘭語の「Tusschenwerpsel」が「感言」と和訳されている。「感詞」より、それと類似した「感言」という言い方が50年も前に取り上げられたことからすれば、江戸期に編述された蘭語学の研究書こそその元であると言えよう。

また、田中義廉は『小学日本文典』で、「感詞は、事物作動に係ること無く、唯喜怒哀樂驚嘆等の情に感じて、發する詞をいふ……此詞は多く發語の如くなりて詞の首に來り、章句の意味

1) Tarlton Perry Crawford・張儒珍. 『文学書官話』. 出版者不明, 1869. pp.35-36

2) 大槻文彦. 『支那文典』 坤卷. 大槻文彦, 1877. p.17

3) 藤林普山. 『和蘭語法解』 第三卷. 水玉堂, 1815. p.32

を強くなすものあり、或は詞の尾に在りて、文意を構成するものあり」⁴⁾と定義している。田中が挙げた「感詞」の例語にも、定義通りに、「マア」、「ヲヤ」のように文頭に用いるものもあれば、「ヤ」、「ヨ」のような文末に置かれるものもある。要するに、田中が考えた「感詞」は日本語文法における「感嘆詞」と「終助詞」の両方とも包含するものである。

『小学日本文典』以外、春山弟彦の『小学科用日本文典』（1877）でも「感詞」が一品詞として立てられ、「発情に感じて覚えず発する聲なりて、詞に意義なく唯悲喜驚嘆の情況を強く示すものなりて、章句の首尾にあらはるる詞なり」⁵⁾と説明されている。例語に「ヤ」、「ヨ」のような終助詞もあれば、「ア」、「オ」、「ヤレ」、「ヤオ」などのような感嘆詞も挙がっており、田中とほぼ同じような取扱い方が採られている。

こうして大槻が原書における「語助言」に「感詞」を訳語として与えた理由は明らかになった。まず、大槻が「語助言」の説明に「情ニ感じ發スル聲ナリ」と言い添えた点で田中と春山による「感詞」の定義とはほぼ一致している。次に、「語助言」の例語に、日本語の「感嘆詞」に相当する嘆詞と、日本語の「終助詞」に当たる語気詞の両方も含まれているので、「語助言」は範囲の上でも当時の日本語の文法用語「感詞」に合致する。従って、大槻は「感詞」を性質や範囲に於いて「語助言」に相当するものと捉えたゆえ、「感詞」を「語助言」の訳語として取り上げたのではないかと思われる。

• 後置詞

信原継雄の『清語文典』では、「助詞」の下位分類とされる「後置詞」には、語気詞の「罷」、「麼」、「呢」、「哪」、「呀」、「罷」、「咧」のほか、構造助詞の「的」、アスペクト助詞の「了」も含まれている。語気詞に関する説明は下記の通りである。

罷 之れは、ヨに相當する。即ち命令の助詞である。去罷

麼 之れは、カヤ等に相當する、疑問の助詞である。不來麼

呢哪呀罷咧 之れ等は総べて、感歎の意を表するのであるが、感歎詞と違ふ所は、獨立して用ゐられないと雲ふ點である。上東京呢 好看哪⁶⁾

以上の説明から分かるように、信原は日本語文法における助詞の概念に依拠し、上記の語気詞

4) 田中義廉. 『小学日本文典』第三卷. 雁金屋清吉, 1874. p.35

5) 春山弟彦『小学科用日本文典』卷2下. 浅井吉兵衛, 1877. p.56

6) 信原継雄. 『清語文典』. 青木嵩山堂, 1905. pp.112-113

を、日本文法に於いて同じく命令、疑問、感動を表す助詞に該当するものと捉えている。また、構造助詞の「的」やアスペクト助詞の「了」が其々名詞、動詞の後に置かれるからして、前記の語気詞が「的」、「了」と併せて「後置詞」として扱われたのは、語気詞が常に文末に来る性質に拠るのではないかと推し量る。

宮脇賢之介の『北京官話支那語文法』でも、語気詞は「後置詞」と称されている。

麼哪麼呀ノ如ク、語ノ終リニ附シ、疑問、命令等ノ意味ヲ表ス助詞ヲ後置詞ト云フ。

先生在家麼、他在家裡做什麼呢、這是誰的啊、這是怎麼賣的呀、請上樓吧⁷⁾

宮脇は「助詞」を「一般助詞」、「前置詞」、「後置詞」に三分している。「一般助詞」が構造助詞の「的」である。常に名詞の前に置かれる介詞が「前置詞」と呼ばれることからすれば、宮脇がこれらの語気詞を「後置詞」と名付けたのも、語気詞の文中に来るべき位置によるところが大きいと思われる。

「後置詞」という名称は本来「前置詞」から改称された術語である。江戸期の欧文典の訳書において蘭語の「Voorzetsels」や英語の「Preposition」の訳語として当てられた「前置詞」は明治前期の日本文典にも直接に受け継がれ、日本語の助詞を称するのに用いられた。しかしながら、その意味では日本語の助詞の性質とは合致しないため、「前置詞」から「後置詞」へと名称の変更がなされている。

表2 明治前期の日本文典における「後置詞」の使用

書名	品詞名	編著者	刊行年次
大倭語学手引草	後置詞	中金正衛	明治4年
日本消息文典	後置詞	藤沢親之	明治7年
小学科用日本文典	後置詞	春山弟彦	明治10年
小学文法書	後置詞	中島操	明治12年

(2) 英和辞書に由来する場合

• 間投詞

『文学書官話』のもう一種の和訳本『村上秀吉著支那文典』において、原文を「間投詞ハ啊、罷、咳、哎哟、罷了、噫、吁、嗚呼等ノ詞ヲイフ」⁸⁾と意識している。村上は原書の例語に「噫」、

7) 宮脇賢之介. 『北京官話支那語文法』. 大阪屋号書店, 1919. pp. 71-72

8) 村上秀吉. 『支那文典』. 博文館, 1893. p. 68

「吁」、「嗚呼」等の文語の嘆詞を付け加えた上に、「間投詞」を「語助言」の和訳語として当てている。「間投詞」という言葉の創出は文久2年（1862）に刊行された日本初の本格的刊本英和辞典『英和对訳袖珍辞書』とは密接な関係にある。本書における「Interjection」という品詞部門に与えられた訳語は正に「間投詞」である。その上、『英和对訳袖珍辞書』と同年に編纂された開成所版『英吉利文典』の訳書『挿訳英吉利文典』（1867）で、訳者の阿部友之進も「Interjection」を「間投詞」と和訳している。また、『英文典直訳』（1867）にも同じ取扱いが見られる。

柳河春三は『洋学指針』（1867）で「喜怒哀楽ニ依テ発スル聲ニシテ文法ノ規則ニ拘ハラズ、文章中上下前後何レノ此処ニテモ其間ニ投ゲ入ル、故ニ即チ間投詞ト名ヅク」⁹⁾と記述し、「間投詞」と命名した理由を明らかにした。黒川真頼の『日本小文典』（1872）では、「間投詞」について「此の詞は、喜悦、憤怒、快樂、哀傷いづれにつけても云はるることは或はこゑにて文章のはじめにも、なかばにも、すゑにも用ゐる故に、間投詞と云ふ」¹⁰⁾と定義した上に、「あ」、「や」、「わ」、「あら」、「ええ」などの感嘆詞の例と「や」、「な」、「よ」等の終助詞の例を列挙している。が、渡辺益軒の『皇国小文典』（1874）と平野甚三の『小学日本文典問答』（1878）となると、「間投詞」の項に終助詞の例が見えなくなり、「オ」、「ア」、「アラ」、「オヤ」などの感嘆詞の例しか挙がっていない。

つまり、当時の日本文典では、「間投詞」を喜怒哀楽などの情緒に動かされて思わずに発する音声と捉えた一方、文法的性質として孤立的で文構造から独立した存在で、文中の如何なる成分とも関係を持たないものとも認識している。「間投詞」の持つこのような「性質」は中国語の嘆詞にも共通して見られる。これこそ村上が嘆詞の例語を主とする「語助言」に「間投詞」を当てた原因であろう。

(3) 中国の古籍に由来する場合

・助語辞

宮島大八は『官話輯要』に於いて、「助語辞」の項で「呢」、「麼」、「罷」、「咧」、「呀」などの語気詞を列挙している。

「助語辞」が文法用語として見えている最も古い文献は南宋、朱熹の『詩集伝』である。朱熹は「南有樛木、葛藟荒之。樂只君子、福履綏之」における「只」について、「只、助語辞」と注釈している。『詩集伝』のほかに、以下の書物にも「助語辞」或いはそれと類似した言い方があ

9) 柳河春三、『洋学指針：英学部』。大和屋喜兵衛、1871。p.56

10) 黒川真頼、『黒川真頼全集』。国書刊行会、1910-1911。p.231

り、しかも「助語辞」を語気詞の解釈に用いる使用例も見られる。

表3 中国の古籍における「助語辞」の記録

出典	原文	注解
(明) 盧以緯『助語辞』	不屑就已、可知己	己、本訓止亦有語終而止、為助語之辞
(清) 張文炳『虚字注釋』	吾必謂之學矣	矣、作助語詞
(清) 伍兆鼈『虚字浅說』	彼其、何其	其、助語辞爾
(清) 劉淇『助字辨略』	王如知此、則無望民之多於鄰國也	於、助語辞、不為義也

尚、「助語辞」という名称は江戸期の日本でも使用されていた。例えば：

表4 江戸期の漢文法の著書における「助語辞」の使用

書名	編著者	刊行年次
龍頭字助語辞	毛利貞斎	天和2年
広益助語辞集例	三好似山	元禄7年
助語辞考録大成	穂積以貫	元禄から享保の間
訓蒙助語辞診解大成	毛利貞斎	宝永5年
重訂冠解助語辞	毛利貞斎	享保2年

青木（1956）の研究によると、中国最古の文法書『助語辞』の日本伝来は、日本における助詞研究の端緒を切り開いた¹¹⁾という。『助語辞』が『新刻助語辞』という名で寛永18年に日本で刊行されて以来、その復刻本が相次いで作られたのみならず、上記のような『助語辞』を中心にした研究も盛んに行われていた。『助語辞』の流行は当時の漢学者の注意を惹き、江戸期の助詞研究の気運を促進した。それに伴う「助語辞」の名を冠する著書の続出は、日本に於いてこの術語自体の多用にも直接に関係していると思われる。

• 語助字

宮島吉敏は『支那語語法』において、「語助字」を「句尾ニ置カレテ一句ノ態ヲ確定スル働キヲ有スル助字ノ名称ナリ」¹²⁾と定義し、「麼」、「啊」、「呀」、「呢」、「哪」、「罷」、「罷咧」、「咧」、「嘍」、「嘍」、「呦」を例に説明している。

11) 青木正見. 「虚字考」. 『中国文学報』第4号, 中国文学会, 1956.

12) 宮島吉敏. 『支那語語法』. 干城堂, 1921. p. 326

干支の次序爾都説得上來麼、我和爾有什麼仇啊、爾到底是去呀是不去呀、爾怎麼不説了呢、他做甚麼哪、爾有事請治功罷、聽不聽隨爾們罷、這是誰的不是咧、別冤佬、義烈男兒作的事到底是與眾不同嘔、沒法子叻沒法子叻¹³⁾

「語助」というのは漢、鄭玄『礼記注』に始まる言葉である。鄭玄は「夫子誨之髴，曰：爾毋從從爾，爾毋扈爾」の「爾」に対して、「爾、語助」と注記している。それ以降の文献資料における「語助」の記録を下表の如くに整理しておく。

表5 中国古来の文献資料における「語助」の記録

出典	原文	注解
(晋) 杜預『左傳注』	命以義夫	夫、語助也
(梁) 周興嗣『千字文』	謂語助者、焉哉乎也	
(唐) 嚴師古『漢書注』	詩不云 <small>虐</small> 、民亦勞止	止、語助也
(宋) 陳彭年、丘雍『廣韻』	也、焉、哉、夫、兮、者、邪	語助也
(宋) 何蓮『春渚紀聞』	焉、哉、乎、也	語助也
(清) 劉淇『助字辨略』	啜其泣矣、何嗟及矣	嗟、語助也

牛島（1956）は南宋以前に使用された助詞を表す用語に対して通時的な収集整理を行った結果、漢代の『詩毛伝』から南宋の『四書集注』までの34冊の文献に現れた145種の用語で、最も使用頻度の高かったのは「辞」、「語辞」、「語助」の3種である¹⁴⁾という。また、上表から、「語助」という語は鄭玄より劉淇まで殆ど不断に用いられていたことが窺えるだけでなく、ほとんどの場合、文尾の語気詞の説明に使用されることも分かる。こうして見れば、後世に長く広く伝承されてきた「語助」という用語が明治、大正期の日本人研究者によって語気詞の研究に引き入れられたのも想像に難くないことであろう。

• 助字 / 助辞

『清語正規』では、「助字」と称するものは主として「罷」、「哪」、「啊」、「呀」、「了」等の語気詞であり、ほかには構造助詞の「的」、「得」も含んでいる。語気詞を説明するのに以下の例文が挙げられている。

13) 宮島吉敏. 『支那語語法』. 干城堂, 1921. pp. 327-337

14) 牛島徳次. 「助字考——宋代以前——」. 『東京教育大学文学部紀要』第7号, 東京教育大学文学部, 1956

快寫吧 正睡响覺哪 在家裡哪麼 您好啊 我呀 怎麼辦好呢 沒甚麼法子了¹⁵⁾

「助字」が最初に見えたのは唐、柳宗元が著わした『復杜温夫書』である。

立言狀物，未嘗求過人，亦不能明辨生之才致。但見生用助字，不當律令，唯以此奉答。所謂乎、歟、耶、哉、夫也者，疑辭也。矣、耳、焉也者，決辭也。今生則一之，宜考前聞人所使用，與吾言類且異，精思之則益也¹⁶⁾。

柳宗元が『復杜温夫書』で列記した「助字」には「乎」、「歟」、「耶」、「哉」、「夫」、「矣」、「耳」、「焉」といった言葉が含まれている。中では、「乎」、「歟」、「耶」、「哉」、「夫」など、疑問の語気を表すものが「疑辭」と、「矣」、「耳」、「焉」など陳述の語気を示すものが「決辭」と呼ばれている。つまり、柳宗元によって取り上げられた「助字」は語気詞のことである。

『馬氏文通』では、馬建忠は「助字」に関して「凡虚字用以煞字與句誦者¹⁷⁾」という定義を下したほか、「所謂助字者蓋以助実字義達字句内应有之神情也¹⁸⁾」と言い添えている。また、「助字」の例として「也」、「矣」、「乎」、「哉」諸字を挙げている。つまり、馬氏が考えた「助字」も文の最後に附加し、語気を表す役割を担うもの、即ち語気詞のことである。

後藤朝太郎の『現代支那語学』では、語気詞の「罷」、「麼」、「哪」、「啊」、「呢」は構造助詞の「的」、介詞の「把」と併せて「助辞」と呼ばれる。

那国的人、把東西拿来、静静儿的罷、備有工夫麼、他叫爾哪、来啊、甚麼意思呢

「助辞」は南宋、陳騏の『文則』に由来する言葉である。

文有助辭，猶禮之有儀，樂之有相也。禮無儀則不行，樂無相則不諧，文無助則不順。檀弓曰：『勿之有悔焉耳矣。』…又曰：『其無乃是也乎。』此二者，六字成句，而四字為助，亦不嫌其多也。檀弓曰：『南宮縚之妻之姑之喪。』凡此不嫌用之字為多…左氏傳曰：『美哉泱泱乎，大風也哉，表東海者，其太公乎，國未可量也。』此文每句終用助，讀之殊無齟齬艱辛之

15) 清語学堂速成科。『清語正規』。文求堂，1906。p.118

16) 柳宗元。『柳宗元集』。中華書局，1979。pp.889-891

17) 馬建忠。『馬氏文通』。商務印書館，1983。p.23

18) 馬建忠。『馬氏文通』。商務印書館，1983。p.23

態。左氏傳曰：『以三軍軍其前。』欲見下軍字有陳列之意則當用其字為有力…¹⁹⁾

陳騏は『礼記』、『孟子』、『春秋左氏傳』、『春秋公羊傳』等の儒学の經典より引証し、助辞の使い方を示している。『文則』に取り上げられた助辞の例に、「乎」、「哉」、「矣」、「耳」、「焉」、「也」といった文末に付く語気詞のほか、代名詞の「其」、介詞の「以」、連詞の「乃」、「之」などの言葉も含まれている。

尚、伊藤東涯、皆川淇園等、日本独自の助詞研究の分野を開拓、発展させた漢学者らの著書にも、「助字」や「助辞」は多用されている。

表6 江戸期の漢文法の著書における「助字」と「助辞」の使用

書名	編著者	出版年
助字考証	伊藤東涯	寛延4年
史記助字法	皆川淇園	宝暦10年
助辞訳通	岡白駒	宝暦12年
左傳助字法	皆川淇園	明和6年
詩經助字法	皆川淇園	天明3年
谷氏助辞解	谷鸞	天明5年
助辞鵠	河北景楨	天明5年
助字解集成	倉橋東門	享和元年
助字雅訓	三宅観瀾	文化5年
助字詳解	皆川淇園	文化11年
助字彙	佐田介石	文久元年

「助字」と「助辞」が本来語気詞を指すのに使えるほか、また専門用語として日本でも極めて通俗に流布したことを背景に、日本人研究者がこの二語を用いて自説の助けにしたのも想像のつくことである。

(4) 江戸期の漢文法の著述に由来する場合

• 問詞、答詞、未定詞

『官話文法』では、著者の田中慶太郎は「麼」、「罷」、「哪」などの語気詞を取り上げ、下記のような平明な語釈をしている。

19) 郭紹虞・羅根澤編『中国古典文学理論批評專著選輯』。人民文学出版社、1960。p.9

- 麼 系問詞、用於句尾、如 他來麼、爾有麼、天晴了麼
 哪 系答詞 還沒哪
 罷 系未定詞、如 要下雨罷、他有罷²⁰⁾

例文からすれば、「麼」が疑問の語気を表す。「哪」が聞き手の注意や関心を現状に向けさせるための語気詞である。「罷」が推測に用いられる。「問詞」、「答詞」、「未定詞」は其々の機能を基に作られた名称と考えられる。ところが、これらの名称は編著者独自の考案と見做すことが出来ない。というのは、徳川時代の漢学者、三好山氏の著『広益助語辞集例』（1694）にはそれらとよく類似した術語が既に取り上げられたからである。

『広益助語辞集例』は盧以緯の『助語辞』より発した研究でありながら、『助語辞』所収の116字を大幅に増広し、原書の内容をはるかに超えたと云ってもいい程である。本文に挙げられた千余りの「語辞」は56類に類別され、この56の分類項目に「問辞」、「答辞」、「未定辞」が見られる。『古漢語語法学資料彙編』には「問辞」や「問詞」の記述が見出されたが、「問辞」が見える最初のもは清、劉淇の『助字辨略』（1711）であり、清、王引之の『経伝釈詞』（1819）における「與」の注釈が「問詞」に関する最も早い記録である。即ち、この語は清の学者に先んずること数十年、既に江戸期の漢学者によって創出されたのである。故に、「問詞」、「答詞」、「未定詞」といった名称を『広益助語辞集例』から援引した可能性は極めて高いと思われる。

3 日本人自身によって創られた術語

(1) 語気詞の機能に基づく場合

• 疑問副詞

『文学書官話』に於いて、「問語言」という品詞部門が設けられている。

問語言一類的話就是、麼、甚麼、為甚麼、怎麼、呢、豈、多會、幾時、可不是²¹⁾

「疑問副詞」に、「甚麼」、「為甚麼」、「怎麼」、「多會」等といった疑問代詞や語気副詞「豈」以外に、疑問の語気を表す語気詞「麼」、「呢」も中に入っている。著者の Tarlton Perry Crawford がこれらの語を同類に扱ったのは、明らかに品詞分類の基準としての文法機能を考慮せずに、疑問に用いられるものを一纏めにしたためである。

20) 田中慶太郎. 『官話文法』. 救堂書屋, 1905. pp. 17-19

21) Tarlton Perry Crawford・張儒珍. 『文学書官話』. 出版者不明, 1869. p. 35

『文学書官話』の和訳本『大槻文彦解支那文典』では、「問語言」を「疑問副詞」と訳した上、「疑フ事アリテ他二問ヒカクル言ナリ」²²⁾と簡単に解釈している。まず、「疑問」という表現を採ったのは定義通りに、上記の語が全て疑問に用いられるからである。続いて、その所属を「副詞」にした理由は何であろうかと言えば、「豈」等は本来副詞であり、「為甚麼」、「怎麼」、「多會」と「幾時」は其々原因や理由、方式や性状、時間を問うのに用いられ、文中では副詞と同じように状語になる場合が多いため、これらの語を副詞と認定したのは無理もない。ところが、なぜ語気詞の「麼」と「呢」まで副詞の一部として扱ったのかというと、その手掛かりを明治前期の日本文典に見出せる。

田中義廉の『小学日本文典』で、副詞は13類に細分類されており、「疑問副詞」がその中の一種である。田中は「疑問副詞」について下記のように述べている。

疑問副詞 如何様に 何故に 乎^ヤ 坎^カ 等の如し

茲に乎^ヤ及び坎^カ々、元來感詞なれども、文意と用法に従て、疑問を示す副詞となるものなり²³⁾

田中が挙げた「疑問副詞」の例語に、「感詞」（今で言う「終助詞」）の「乎^ヤ」、「坎^カ」が含まれている。また、同氏は「時鳥鳴クヤ五月」、「玉ニモヌケル春ノ柳カ」における「ヤ」と「カ」が感詞で、「紅葉ノハレハ散ルヤ散ラズヤ」、「寝テカ寤テカ」というような、疑問を表す「ヤ」と「カ」が副詞であると指摘している。つまり、「ヤ」と「カ」は感嘆に用いる場合に「感詞」で、疑問を示すのに使われた場合に「疑問副詞」に転用できると理解してよからう。『大槻文彦解支那文典』に見られた例文「今日要上城麼」と「為甚麼打仗呢」から、「麼」と「呢」も疑問を示すものとして挙げられたことが分かる。大槻が句末に使われる語気詞の「麼」、「呢」を「副詞」の枠内に取り入れたことと、『小学日本文典』における「カ」と「ヤ」への取り扱いとの間に、何らかの関連性が存在しているのではないかと推察する。

• 疑問詞

『村上秀吉著支那文典』では、著者の村上は「問語言」を「疑問詞」と和訳しているほか、原書の例語に文語語気詞の「乎」、「哉」、「耶」を書き加えている。

22) 大槻文彦. 『支那文典』坤巻. 大槻文彦, 1877. p.16

23) 田中義廉. 『小学日本文典』第三巻. 雁金屋清吉, 1874. p.27

麼、甚麼、為甚麼、怎麼、呢、豈、多會、幾時、可不是、乎、哉、耶、如何ナドハコレ
疑問ノ記號なり²⁴⁾

大槻と村上は共に、原書に挙げた例語が全て疑問を表すのに使用できることで、「疑問」という表現を採っている。但し、少し異なるところに、大槻は「疑問副詞」と名付けることによって、これらの語が「副詞」の一部であることを明記し、その所属を示しているのに対して、村上はただ「疑問詞」と訳し、これらの語が一体どの品詞部門に属しているのかについて全く言及していない。

(2) 語気詞の位置に基づく場合

・句尾ノ助詞／句末助詞

「句尾ノ助詞」は『支那語文法』に使われた言葉である。著者の石山福治による定義と例示は以下のようなになる。

句尾乃チ一成句ノ最後ニ置カレテ其意義カ句ノ全体ニ及ホスモノ
那不是馬麼、請上樓罷、這是我的呢、快來呀、咱們走啊²⁵⁾

尚、米田祐太郎は『支那語文法研究』で語気詞を「句末助詞」と名付け、以下の例を挙げている。

你這樣做法真是惡極了、家裡的人也要來看你的、你去做事情罷、你到那個地方去呢、這是我們的幸福哪、這是誰的東西啊、這件事情實在不奇怪呀、怪不得他立刻要死哩、我們所要做的事真多啦、今天的戲好嗎²⁶⁾

石山と米田は共に語気詞が文中に来る位置を基に、「句尾」、「文尾」といった修飾語を加えているほか、語気詞を助詞に所属させた点に於いても同様な見地を持っている。

語気詞が助詞の範囲内で取り扱われた歴史は長く、このような記述は中国古来の典籍、及び江戸期の漢学者の著述には少なからず見出される。

24) 村上秀吉. 『支那文典』. 博文館, 1893. p. 66

25) 石山福治. 『支那語文法』. 文求堂, 1908. p. 181

26) 米田祐太郎. 『支那語文法研究』. 大阪屋号書店, 1922. pp. 112-114

まず、中国の古籍における助詞に関する論説を通時的に調べると、唐の柳宗元は『復杜温夫書』において「乎」、「歟」、「耶」、「哉」、「夫」、「矣」、「耳」、「焉」等の語気詞を助字の例として挙げている。南宋の陳騏の著『文則』に取り上げられた助辞の例に、「乎」、「哉」、「矣」、「耳」、「焉」、「也」、「歟」といった語気詞が含まれている。清、劉淇の『助字辨略』では、名詞と動詞以外の何もかも助字の範疇内に包含され、中には「乎」、「兮」、「哉」、「焉」、「麼」、「邪」、「而」、「耳」、「矣」、「也」などの語気詞も見られる。

次に、江戸期の漢学者の手による助詞に関する研究書にも語気詞の例語が数多く入っている。詳しいことは下表に整理しておく。

表7 江戸期の漢文法の著述における語気詞の語例

書名	編著者	出版年	語気詞の語例
助字考証	伊藤東涯	寛延4年	也、夫、與、爾、耳、而、矣、焉、乎、哉、耶
史記助字法	皆川淇園	宝暦10年	矣、也、焉、而、然、耳、矣、爾、乎、哉、夫、歟、邪
助辞訳通	岡白駒	宝暦12年	也、矣、焉、乎、哉、邪、與、耳、爾、而、夫、兮、然
訓訳示蒙	荻生徂徠	明和3年	也、矣、焉、兮、耳、爾、而、乎、邪、耶、歟、與、夫、哉、者
左伝助字法	皆川淇園	明和6年	也、矣、焉、乎、哉、与、夫、邪、而
詩経助字法	皆川淇園	天明3年	兮、矣、也、焉、然、爾
助辞鵠	河北景楨	天明5年	焉、乎、與、耶、夫、哉、耳、爾、而、然、兮、也、矣
助字詳解	皆川淇園	文化11年	矣、也、焉、夫、哉、歟、而、然、耳、爾、乎
助語審象	三宅橋園	文化14年	矣、也、哉、焉、耳、爾、夫、耶、乎、歟、而、呢、哩
助字躰	佐田介石	文久元年	矣、兮、也、者、焉、哉、夫、乎、邪、歟、耳、爾
助辞新訳	東條一堂	明治3年	矣、也、焉、乎、爾、耳、與、邪、哉、夫

以上の考察を通して明らかになるように、中国の古籍でも日本の漢文法の著述でも、語気詞は常に助詞の中に含まれる一部分である。それゆえ、明治、大正期の日本人研究者が語気詞を助詞に帰属させたのは、古来の取り扱い方に従い、その後を継いだゆえにほかならないと思われる。

• 語尾ノ助動詞

啊麼徒は語気詞を「語尾ノ助動詞」と名付け、「助動詞」の下位類としている。

或思想ヲ、言語ニ表ハス場合ニ於テ、其語意ヲ補ヒ、又ハ之ヲ強ムル等ノ為メニ、語尾ニ一定ノ助動詞ヲ付ス、其表ハス所ハ種々ナリト雖モ、皆語尾ニ付スル点ニ於テ、一致スルガ故ニ、之ヲ此ニ語尾ノ助動詞ト名ケ、一括シテ説明セントス。

車來了麼、這是誰的像片兒啊、這個東西怎麼賣呀、離京還有多遠呢、是個姓甚麼的人哪、我一定有信來的、倆留著罷、天天兒不閑著罷咧、好啦好啦、這是誰的不是咧、十個捆兒全都給過了槍嘍、這個毛病在那兒呦、敢情就是沒有家庭教育嘍²⁷⁾

啊麼徒は語気詞と動詞との位置関係によって「語尾」という表現を使っているが、石山と米田と異なるところは、語気詞を助動詞の一類と見做しているのである。それはなぜかという、まず、日本人による中国語文法書では、語気詞を助詞の枠内で取り扱うことが多い。しかしながら、『北京官話文法・詞編』では、語全体を「名詞」、「代名詞」、「動詞」、「形容詞」、「数詞」、「陪伴詞」、「前置詞」、「副詞」、「接続詞」、「間投詞」の10品とし、「助詞」又はそれと類似した品詞部門は設けていない。

次に、本文における「助動詞トハ、常ニ他ノ動詞、又ハ其他ノ詞ニ、從屬的ニ結合シテ、動作ノ時、及び其他説話上ノ意義ヲ、明確ニスル為メニ用フル詞ナリ²⁸⁾」という定義から見れば、啊麼徒は助動詞がどのような機能を果たしているかについて「説話上ノ意義ヲ明確ニスル」という極めて漠然とした表現でもって説いているほか、助動詞と動詞の位置関係に全く言及していない。このような見方の影響の下で、啊麼徒は動詞に対して働きかけるもの、例えば今現在でいう「能願動詞」と、否定副詞の「不」、「没」、「別」、受動や使役に用いる介詞「被」、「叫」、「讓」等の動詞の前に来るもの、構造助詞「的」、「得」、アスペクト助詞「着」、「了」、「過」、及び語気を表す語気詞のような動詞の後に加わるものを全部「助動詞」に帰属させたわけである。

4 終わりに

以上、明治・大正期の日本に於いて刊行された中国語文法書群における語気詞の説明に用いられた名称の由来について考察を加えた。

まず、他文献から術語を取り入れた場合：

『文学書官話』における「語助言」に、「感詞」と「間投詞」の二種類の訳語が当てられている。大槻本における「感詞」は洋風日本文典、田中義廉の『小学日本文典』から出たもので、性質と範囲の上では「語助言」と一致するゆえ、大槻によって採り入れられたのである。村上本に用いられた「間投詞」は元来、日本初の本格的刊本英和辞典『英和对訳袖珍辞書』における「Interjection」の和訳語で、「語助言」に含まれた嘆詞の部分と性質上類似しているので、「語助言」の訳語として採用されたと推察される。「後置詞」は信原の『清語文典』にしか見受

27) 啊麼徒. 『北京官話文法・詞編』. 文求堂, 1919. p. 117

28) 啊麼徒. 『北京官話文法・詞編』. 文求堂, 1919. p. 86

けられず、本来日本文典に於いて多用された文法用語で、蘭語「Voorzetsels」の和訳語「前置詞」から改称されたものである。

「助語辞」、「語助字」、「助字」、「助辞」の四語は共に中国の典籍における古人の用語をそのまま継承したもので、中国の古籍に限らず、江戸期の日本で当時の漢学者によって盛んに行われた漢文法の研究にも多用されていたゆえ、明治以降の中国語口語文法の研究にも用い続けられたのである。「問詞」、「答詞」、「未定詞」といったものは江戸時代の漢学者、三好似山の著『広益助語辞集例』から引き入れられた名称である。

次に、日本人研究者自身によって命名された場合：

「疑問副詞」と「疑問詞」は共に『文学書官話』における品詞名「問語言」に対して、それが疑問を表す機能を基に作られた訳語である。但し、大槻がその所属を「副詞」にしたのは、田中義廉が『小学日本文典』で同じく疑問を表す終助詞の「カ」、「ヤ」を「疑問副詞」として取り扱ったことと関連性があると思われる。「句尾ノ助詞」、「句末助詞」は共に語気詞が文中に来るべき位置による命名である。語気詞を助詞の類に帰属させたのは、中国古来の典籍や日本の漢文法の著述に於いて、語気詞が常に助詞の中に含まれるという古来の取り扱い方を踏襲したゆえである。「句尾ノ助動詞」も語気詞の動詞に対する位置関係によってつけられた名称であるが、それを「助動詞」に入れたのは、著者の啊麼徒が動詞の前に用いるものであろうと、動詞の後に加わるものであろうと、動詞に対して働きかけるものを全て助動詞と認識したためである。

総じていえば、日本人研究者は中国語語気詞論を構築する中、語気詞の機能や位置を基に自ら名称を案出しただけでなく、中国の古籍における先人の説をそのまま継承したり、江戸時代の漢文法の研究成果や江戸末期以降の英和辞書と日本文典から語気詞と類似した文法概念を引き入れたりするなど、多重素因の影響を受けている。つまり、日本人による中国語語気詞の研究には、独創性がある一方、継承性も備わると考えられる。